

百丈懷海の「三句」の思想について

土 屋 太 祐

『百丈広録』¹⁾ (以下『広録』) の内容は非常に難解であるが、本稿では、そこに現れる「三句」の思想の意義を、馬祖道一(709-788)の「作用即性」説の流行から、それに対する批判の出現という歴史的な文脈²⁾の中で考察してみたい。

馬祖は、人の動作、作用、認識作用(見聞覚知)、そして認識対象にいたるすべてが仏性から現れたものであり、かつ仏性と等しいと考えた。このような思想を一般に「作用即性」説と言う。その裏には認識における空観の必要性など複雑な要素があるが、しかし当時の修行僧たちはこれを、「作用」と「仏性」を等置する思想として安易に理解した。そして、このような理解に基づき、「作用即性」説は大いに流行したのである。馬祖以降の禅師たちはこのような「作用即性」説の流行を危惧し、それに対する批判を契機として自己の思想を形成していった。馬祖の弟子である百丈懷海(生没年不明)の思想もまた、馬祖の思想に対する反省をその出発点としている。まずは、馬祖に対する彼の態度を見てみよう。『広録』にいわく、

語也垛生招箭，言鑑覺猶不是。從濁辨清，許說如今鑑覺是，除鑑覺外別有，盡是魔說。若守住如今鑑覺，亦同魔說，亦名自然外道。說如今鑑覺是自己佛，是尺寸語，是圖度語，似野干鳴，猶屬糲膠門。本來不認自知自覺是佛。向外馳求覓佛，假善知識說出自知自覺作藥，治箇向外馳求病。既不向外馳求，病瘥，須除藥。若執住自知自覺，是禪那病，是徹底聲聞。(柳田聖山主編『宋藏遺珍宝林伝・伝灯玉英集』、『禅学叢書』之五，京都：中文出版社，1975年，p.420a) (以下『禅学叢書』五と略す)

「鑑覚」は『広録』中に繰り返し現れ、キーワードとなっている。この語は後に「自知自覚」とも言い換えられ、認識の働きを表している。とすれば、ここに言う「如今の鑑覚は是れ自己仏」という言い方は、まさに馬祖の「今の見聞覚知は元より是れ汝の本性」(『宗鏡録』巻十四，T.48-p.492a)という言葉と同様の発想であり、「作用即性」の思想を表していると考えられる。ここで百丈は、この「鑑覚」を「守住」すれば、それは「魔説」になると言う。なぜならば、「如今の鑑覚は是れ自己仏」という言葉は一種の概念に過ぎず、決して真理そのものではないからであ

(58) 百丈懷海の「三句」の思想について (土 屋)

る。ここに列挙される「尺寸語」,「凶度語」,「野干鳴」,「藕膠門」等は、すべて、体験にあらざる概念,劣った教説等を指す言葉である。そして百丈は、「本来『如今の鑑覚は是れ自己仏』という考え方はなかったのだが、一部の人が自己の外側に仏を探すので、善知識の言う『自知自覚』を薬として、『外側に探し求める』病気を治そうとするのである。もし病気が治れば、薬は放棄されなければならない。もし『自知自覚』という教説に執着すれば、それは新たな病気にほかならない」と言う。これはよく見られる発想である。たとえば同時代の南泉普願が、やはり「作用即性」説の流行を批判する文脈で述べた言葉、「江西和尚の『即心即佛』と説くは、且つ是れ一時間の語、是れ向外馳求の病を止む、空拳黄葉止啼の詞なり」(『祖堂集』巻十六、京都：禅文化研究所、1994 影印、pp.587-588)と同趣旨である。以上のことから、百丈が馬祖「作用即性」説流行の弊害を問題と考えていたことが読み取れる。

「三句」の思想の目的はまさにこのような問題の解決にあると見られる。では、「三句」とはいかなる思想であろうか?『広録』にいわく、

夫教語皆三句相連、初、中、後善。初、直須教渠發善心；中、破善心；後、始明好善。菩薩、即非菩薩、是名菩薩；法、非法、非非法、總與磨也。若祇說一句、令衆生入地獄；若三句一時說、渠自入地獄。不干教主事。說道如今鑑覺是自己佛、是初善；不守住如今鑑覺、是中善；亦不作不守住知解、是後善。(『禅学叢書』五、p.422b)

以上がいわゆる「三句」の思想である。最後の一句から、百丈は「鑑覚は是れ自己仏」、つまり「作用即性」説の弊害に対して、「三句」を唱えたと分かる。百丈の言葉によれば、「三句」の第一段階では「如今の鑑覚は是れ自己仏」という命題を提出し、第二段階でこの命題に対する執着を打破し、第三段階でこの「執着しない」という考えをも消滅させる、ということになる。このような「肯定」→「否定」→「否定の否定」と進む三段階の論理によって「作用即性」説に対する執着を完全に消滅させることが、百丈の目的であると言える。

このような「三句」の思想の教理学上の根拠は『金剛般若経』にあるとされる。行秀『従容庵録』第七十六則『本則評唱』にいわく、「三句の作は、百丈大智に始まり、『金剛般若』に宗する。」(Z.117-p.746a) たしかに、『金剛般若経』には「莊嚴仏土者、則非莊嚴、是名莊嚴」(T.8-p.749c)といった句法が随所に見られ、これが上の引用の「菩薩は、即ち菩薩に非ず、是れを菩薩と名づく」という言葉の根拠になっている。さて、周知の如く、『金剛経』のこのような思想は、鈴木大拙の言う「般若即非の論理」にほかならない。大拙は「すべての観念がまず否定

されて、それからまた肯定に還るのである。」「これが般若思想の根幹を成している論理で、また禅の論理である」（『金剛經の禅』、『鈴木大拙全集』第五卷、東京：岩波書店、1968年、pp.380-381）と言う。この三句形式の思想は、確かに禅林において長く伝えられ、禅僧の思惟方式に大きな影響を与えた。大拙はこのような伝統に基づいて「即非の論理」を取り上げたのであろう。

さて、上の引用において、「三句」の目的は「作用即性」の教説に対する執着を打破することにあつたが、より多くの場合、「三句」が対象としているのは現象に対する執着である。その目的は空観を確保し、「鑑覚」の清浄を守ることにある。たとえば、『広録』にいわく、

須辨清濁語。濁法者、貪、瞋、愛、取等多名；清法者、菩提、涅槃、解脫等多名。祇如今鑑覚、但於清濁兩流凡聖等法、色聲香味觸法、世間出世間法、都不得有纖毫愛取。既不愛取、依住不愛取、將爲是、是初善、是住調伏心、是聲聞人、是戀筏不捨人、是二乘道、是禪那果。既不愛取、亦莫依住不愛取、是中善、是半字教、猶は無色界、免墮二乘道、免墮魔民道、猶是禪那病、是菩薩縛。既不依住不愛取、亦不作不依住知解、是後善、是滿字教、免墮無色界、免墮禪那執、免墮菩薩乘、免墮魔王位。……若透三句得過、不被三段管、教家舉喻如鹿得三跳出網、喚作纏外佛、無物拘繫得渠、是屬然燈後佛、是最上乘、是上上智、是佛道上立。（『禅学叢書』五、p.419a-b）

ここで問題となっているのは「清濁の法」である。清法であろうと濁法であろうと、これらの法に執着を生じれば、「鑑覚」は仏性の作用ではなくなってしまう。そこで、百丈は「鑑覚に纖毫の愛取が無い」（＝初善）、「不愛取に依住しない」（＝中善）、「依住しないという知解を作さない」（＝後善）という三段階の論理を経て、対象に対する認識の執着を解消しようとする。このような例は『広録』中、杖拳にいとまがない。ここで百丈は認識作用をそのまま仏性と等置する単純な「作用即性」思想に対し、認識作用を認識対象に対する執着から救い出し、その清浄を確保しようとしているのである。上に紹介した「三句」と比較して、その表現にはややブレが見られるが、鑑覚にまつわる問題、つまり「作用即性」説の弊害を克服せんとする問題意識は共通していると考えてよいだろう。

このように、三句の思想は百丈の思想の基礎を構成しているが、その最終的な目的は馬祖「作用即性」説をその弊害から救い出すことにあるのであって、馬祖の思想を否定することではない。したがって、その最終的な帰結は馬祖と異ならないのである。このような葛藤は、冒頭の引用で「現在の鑑覚がそれ（仏性）である、というのはかまわない。もし鑑覚のほかに（仏性が）有るとすれば、それは魔説である」と前置きしてから、「作用即性」の批判に入ることにも見て取れる。

(60) 百丈懷海の「三句」の思想について (土 屋)

以下の『広録』中の三例は百丈の思想の最終的な境地がやはり「作用即性」的地平にあることを示している。

夫讀經看教，語言皆須宛轉歸就自己。但是一切言教祇明如今鑑覺自性，但不被一切有無諸境轉，是如導師，能照破一切有無諸境，是金剛慧，即有自由獨立分。若不能與磨會得，縱然誦得十二圍陀典，祇成箇增上慢，卻是謗佛，不是修行。但離一切聲色，亦不住於離，亦不住於知解，是修行。（『禅学叢書』五，p.424a）

彼はここで、若し現象に対して執着がなければ、自己の「鑑覺の自性」は真理となることを述べている。このような考え方は、馬祖と全く一致するものである。

須辨主客語。貪染一切有無境法，被一切有無境惑亂，自心是魔王，照用屬魔民。祇如今鑑覺，但不依住一切有無諸法，世間出世間法，亦不作不依住知解，亦不依住無依住知解，自心是佛，照用屬菩薩心。（『禅学叢書』五，pp.421b-422a）

ここでは、「三句」の二重否定を経た後、自心が仏である事を述べている。

祇如今但無十句濁心：貪心，愛心，染心，瞋心，執心，住心，依心，著心，取心，戀心，但是一句各有三句，箇箇透過三句外，但是一切照用任聽縱橫，但是一切舉動施為語默啼笑盡是佛慧。（『禅学叢書』五，p.433a）

「^{あらゆる}但是一切の挙動施為語默啼笑は尽く是れ仏慧なり」という言い方は、まさに「作用即性」説と同様である。

このように、百丈は最終的に作用の真理性を否定しない。このことから「三句」の思想の目的は、「作用即性」の全否定に在るのではなく、その弊害を克服して、再び作用の肯定に回帰することにあると考えられる。このような思想現象は一人百丈に限ったことではなく、南泉，玄沙などによりはっきりと見て取れる³⁾。これらの現象は馬祖後の禅林における思想動向をよく代表している。そして百丈も、このような時代の流れの中で、自己の思想を形成していったのである。

-
- 1) 『百丈広録』のテキストに関しては、宇井伯寿『第二禅宗史研究』，東京：岩波書店，1925年，pp.372-375を参照。
 - 2) この間の思想史的展開に関しては、拙文「玄沙対“昭昭靈靈”的批判再考」，『宗教学研究』2006年第2期，を参照。
 - 3) 拙文「玄沙師備三句綱宗与薦福承古三玄的比較—禅宗思想在唐宋之際的變化的一個例子」，『普門学報』第33期，2006年を参照。

〈キーワード〉 馬祖道一，百丈懷海，『百丈広録』，作用即性，三句
(東京大学グローバル COE「死生学の展開と組織化」特任研究員)